

「中に舐まれたら ヒーロー に 変身

目が覚めた時には処女喪失!?

無知ゆえの淫語言おせ放題♡

できるんですね!?!」

ノンストップメス堕ちストーリー





幼い頃からずっとヒーローに憧れていた。
悪い奴をやっつけて、皆の笑顔を守るヒーローに……。

「変身だ！ 英雄(ひでお)くん！」

「は、はい……」

白衣姿の男が少年の肩を撫でまわす。

二人は一瞬甘い視線を交わした。

そして男の手はおもむろに少年のパーカーを捲りあげる。

少年は大人しく万歳をして、そして……

あっという間に、全裸になった。

恥ずかしそうに胸と股間を両手で隠しながら、ニヤつく男の視線に耐えている。

「あの。全部脱ぐ必要はないんじゃないか……」

「ほう、君は下だけ脱いで事を済ませようと言うのかい？」

「え、いや、だって……」

「せっかちさんなんだね♡」

耳元で囁かれて少年の顔面がボン！ と赤くなる。

小さな研究所は地響きでズシンズシンと振動する。外で大型怪人が暴れているのだ。

ヒーローは一刻も早く駆け付けなければならない。

だから最低限の準備で早く出動しようという少年の心掛けはとても立派なものなのだが――博士にしっかりと全裸にされてしまった少年は、なおも恥ずかしそうに縮こまる。

「さて、それじゃいただくと……いや、『変身』を始めるとするか♡」

「……………」

博士の言い間違いに気付かないふりで、少年は瞳を伏せる。

正面には当たり前のような顔をした博士が、その小さな肩を包んで……。

チュッ♡

唇を小さく吸い上げる。

言っておくがこの二人は恋人同士でもなんでもない。

唇を重ねてチュッチュッと吸い合う行為もまた、博士の言う『変身』のために必要な行為なのだ。

二人がこれを始めた経緯は、一ヶ月前に遡る――――。

「博士！ 僕、ヒーローになりたいんです！」

「わかった！ すぐに改造手術をしよう！」

予想外の快諾だった。

人体を弄って超人的な力を発揮させるという大変な手術をするのだ、もっとよく考えて、とか諭されると思っていたのに……。

少年は拍子抜けだ。

博士は「そうと決まれば早くここに横になって♡」と手術台を準備し始める。

おそらく麻酔であろう薬品を注射器で打たれて、少年はあっという間に意識を手放した。

目が覚めた時、少年は明らかに自分の身体が変わっているのを感じた。

見た目はさして変化がないが……身体中が熱くて、肛門がジンジンしている。

それになんだか、顔が、カバカパしていて……。

「君の変身方法は『肛門性交』だよ♡」

事もなげに博士は言った。少年はとっさに漢字変換できない。

こうもん、せいこう、とは？

「実際にやってみようか♡ 記念すべき初変身だッ♡」

「えっ？ あのあのちょっと……」

掛けてあったシーツを剥がされてはたと気付く。全裸だ。

隠そうとする前に博士が覆い被さってくる。

そしてなんと、まだ幼い少年の唇に自らの唇を思いきり埋めたのだ！

ブッチュ〜〜〜〜ッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「ンッ！？！？」

「ああ、まだ君の処女を奪った興奮が冷めやらないよッ！ 英雄くん、口を開けて♡」

博士の顔がいつになくだらしない。言う通りにぱかっ唇を開けた少年の口内に、舌を挿じ込んでジュルジュルと唾液を吸い上げてくる。

色恋もファーストキスもまだだった少年は目を白黒させて、その一方的なキスを受け止めるしかない。

「ふッ♡ ふッ♡ 英雄くん……！♡♡」

「ンっ、ンっ……ハアッ……はかせ……？」

「これは『変身』の正式な手順なんだよッ♡ さあ、自分から舌を絡めて♡ 私と愛し合う

んだッ♡」

「ンぶ〜〜ッ♡♡」

あまりに強引なキスだった。だけど唇をブチュブチュ吸われて口内を舐めまわされているうちに……少年の身体ははじめての快樂に目覚めてしまう。

言われた通りに自分からも舌を出して博士にジュルジュルと吸い上げられた。

気持ちが良かった。されるがままだった。

「いいねえ〜キス無抵抗だなんて♡ 自分が誰のモノなのか、カラダが覚えているのカナッ？♡♡」

「う……？♡」

「ああッ興奮するよ！ まさか君が自ら私にカラダを委ねてくれるなんてねエッ！♡♡」

口だけに飽き足らず、博士の手が少年の全身を這いまわる。

その大きくて熱い手になぜだか感じてしまう。

これも手術の影響だろうか。

少年はボンヤリとしか思考できず、無抵抗で博士の愛撫を一心に受けた。

(ああン、そんなところ触っちゃダメ……ダメ、ダメ、ダメ♡)

思えど身体が動かない。手術の後遺症だろうか。それともこれが変身に必要な行為だから、手術済みの身体が当たり前に受け入れている……とか？

少年は己の今の状況を正当化した。

そうしている間にも唇をブッチュブッチュとさまざまな角度に吸い出され、押し潰され、レロレロと鼻息荒く舐めまわされる。

「ぶはあ！！♡♡ ど、どうだい？ キス、はじめてだろうッ？♡♡」

「ふえ……はいい……♡♡」

「トロ顔いいねえ♡ その調子で私のことを受け入れなさい♡ 私と君の平和を願う祈りが君の身体の中で結合した時、君はヒーローになれるんだッ♡♡」

「平和を願う、祈り……」

なるほど。二人分のパワーを込めることで僕は無敵のヒーローになれるということか。

少年は納得して、ふたたび博士の粘着質なキスと愛撫を受け入れる。

熱心なパワー注入に応えるべく、できるだけリラックスした。

そのおかげで口が緩んで「あん♡」「あッ♡」と小さく鳴くものだから、博士はもう辛抱たまらなくなってしまった。

「脚を開いて……今一度、君のすべて私に委ねるんだ♡」

「あッ……♡ あ、あ、ああン〜〜……♡」

ピチャピチャと耳を舐められながらの囁き。

内股を大きな手に撫でまわされて、そこから博士の体温が移ったように少年は熱くなる。

「私と好き合って交わることで愛のビッグバンを起こすんだよ……ほら、君の変身口上を教えるからネッ♡」

「あ、あ、あうう？♡♡」

「『僕のおまんこに容赦なくぶち込んでくださいっ♡♡ 無責任中出しして欲しいです♡♡』ホラッ言ってッ♡♡♡♡」

「ふえ……？」

「言って！！♡♡♡」

「ア……ぼ、ぼくのおまんこに、ようしゃなく、ぶちこんで、くださいっ??♡♡」

「ウンウン！！♡♡♡」

「むせきにん、なかだし、してほしいのおッ……♡♡」

「言えたね！！ えらいよ～～ッ♡♡♡♡♡♡」

ブチュチュチュチュ～～～～ッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

二の句が継げないよう唇を塞がれて、肛門を撫でられる。

身体が勝手にビクビクと震えて悦びだした。

やがて男がチュコチュコと指でそこを穿ち、『おまんこ、ぶちこむ、むせきにん、なかだし♡♡』と耳元で洗脳してくる。

少年が熱に浮かされて復唱するとあら不思議。

二人は瞬時に合意で生ハメセックスをする関係へとレベルアップしてしまった。

「おまんこここだよ♡♡ 好きかいっ♡♡ おまんこ♡♡ ハメるよっ♡♡」

「アッアッ……いやあ～～♡♡♡ はかせッ♡♡ はかせエ～～ッ♡♡♡」

「おおッ♡ そ、そんな引き寄せたらッ♡♡♡」

無我夢中にしがみつく少年。

おかげで腰が入り、博士の切先が指で拡張された肛門にズブズブと挿入されていく。

そんなこと望んでいないはずなのに。なぜだか少年は自分から股を広げて、胎内に侵入しやすいように下半身をさらけ出してしまう。

ぬぷぷぷぷぷ……バチュんっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「おおおおお～～～～ッ♡♡♡♡♡♡ やったッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「んぐう♡♡♡♡♡♡」

「お♡ おッ♡ おッ♡ おッ♡ おッ♡ おッ♡ おッ♡ おッ♡ おッ♡ おッ♡ おッ♡ おッ♡ おッ♡ おッ♡」

「は……ッ♡ やめ♡ まっ、へ♡」

「気持ちいいよ♡♡♡♡ 英雄くんのショタ雑魚まんこ♡♡♡♡♡」

「あああ〜〜〜〜〜♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

顔を覗き込みながら正常位で責め立てる。

真っ赤で愛らしい犯され顔に博士はますますヒートアップする。

……ほんの数十分前に処女を奪ったアナル。今ふたたび、ズップズップと容赦なく大人の本気ピストンをお見舞いしている。セカンドバージンまで…………♡♡♡

「ク〜〜〜〜〜♡♡♡♡♡♡♡」

「はかせえ、もうゆるし、ひぐう♡♡」

「んで！？！？♡♡ 次はどうするんだっけ！？！？♡♡」

「あうう！？♡♡♡♡♡♡」

「無責任中出しだろ♡♡この美少年オナホが♡♡！！♡♡♡♡♡♡」

「あああ〜〜〜〜〜♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

知らないはずの快感が少年の身も心も支配する。

ズチュズチュと身体を中心を貫かれて無様に喘ぐしかできない。

男はしきりに「可愛い♡」「俺のだ」と繰り返して唇を噛み噛み、脇をペロペロして恍惚とする。

「たまらん♡♡♡ 出るぞ♡♡♡♡ 受け止めてくれ英雄くん♡♡♡♡」

「お……………！！！！♡♡♡♡♡♡」

声にならない声。目玉をひっくり返らせ「お」の口のまま硬直する。

対して蕩けるようなゆるふわアナルに男は気持ちよく生ハメ無責任中出しをした。

どププププ♡♡♡♡♡♡♡♡♡

重量感のある感触に、少年の身体が妖しく震える……………。

「ハア、ハア♡……どうだい？♡♡ 力が漲ってくるだろう♡♡」

「ふア♡♡ ひ♡♡ あちゅいい♡♡♡」

「そうだ♡♡♡ その熱に身を任せて♡♡♡」

肉棒がチュボンと抜け出す。

胎内からトロトロと何かが流れ出す感触に少年はうっとりとした。

粘着質にチュクチュクと唇を奪う博士。

独占欲丸出しのすけべな目で少年の瞳を覗き込む。

「最後の口上を教えるよ♡ここで私が「好きだよ、英雄くん♡」と言う♡ そうしたら君は『博士、僕も愛してます……♡』と、心を込めて答えるんだ♡」

「あ、あ♡…………♡」

ギュッと抱きすくめられて耳元で息をされる。

それだけで少年は多幸福感に包まれた。

「いくよ……好きだよ、英雄くん……♡」

「はうんッ……♡ 博士……愛して、ます……♡」

口説かれ堕ちた少年は、無意識に博士の背中を抱き寄せていた。

相思相愛の状態で二人は光に包まれる。

少年は全身がメラメラと燃えるような熱気に包まれ……

次に目を開けると、紺と赤を基調としたピチピチのヒーロースーツに身を包んでいた。

「変身成功だ♡ ああ、英雄くん、気持ちよかったよ♡♡♡」

「は、博士……♡♡♡」

ふたたび唇が重なる。二人はいつまでもそうして『変身』の余韻に浸っていた。

どう見ても相思相愛の恋人同士にしか見えない、けれど本当は付き合ってもいない成人男性と少年という、ドスケベな関係性が、二人の間に出来上がってしまった……。

次に怪人が現れた日から、少年はほんとうにヒーローになった。

どこからともなく颯爽と現れては、圧倒的なパワーで怪人をボコボコに殴りつけて戦闘不能にする完全無欠のヒーロー。

それがまだ年端もいかない少年だというのだから、人々は熱狂した。

「おかえりヒーロー♡♡」

笑顔で出迎える博士。

戦闘を終えて戻ってきた少年を抱き留めてブチュブチュとキスをかます。

腕を持ち上げてノースリーブの脇を露出させ、ジュルジュルと自分の唾液を塗りつけては激しく吸い上げた。

「ウヒョヒョ♡♡ 世界を救った直後の美少年の脇うめ……♡♡♡♡♡♡」

「いやあん……ダメ……♡♡♡♡♡♡」

「ダメじゃないだろ感じているくせに♡♡ 悪いヒーローだ♡♡♡♡」

「あああん……♡♡ 博士エ……♡♡♡♡」

体験版はここまでです。

続きは製品版でお楽しみください。